ZOOM UP

ズームアップ

商社の人と仕事

伝統の「きもの」から、ファッションとしての「きもの」まで

植葉　剛三（うえば　こうぞう）
京都丸紅株式会社
商品企画室室長

当社は1977年に丸紅㈱京都支店から事業会社として独立し、本年度は設立30周年の年を迎えました。着物という日本文化の一翼を担う商品を取り扱う企業として、今に適した「きもの」を提案し続けています。

私は1974年に入社以来、商品企画の業務に携わってきました。その視点から、他商社にはないユニークな当社の活動状況をご紹介します。

芸術家達による「あかね会」の結成…、「美展」とは…

ー伝統ある「フォーマルきもの」の開発・製作ー

当社の主力商品のひとつに「美展」があります。1927年の開催以来、本年度で150回を数える「美展」は、染織の名匠の手による高級呉服の逸品会として業界に認められ、きもの文化の発展に貢献してきました。「美展」草創期の精神を引き継ぎ、染織美術研究会会員38名の染織家の方々とともに、消費者に心から満足していただける着物作りに取り組んでいます。また、金沢の加賀友禅を担う作家とともに、10年前から着物作りに取り組み、「加賀名匠創作展」として「美展」と同時開催しています。

当社は、大正年代末には付加価値の高い着物作りをめざす「考案部」を新設し、意匠開発に取り組んできました。意匠の革新のため、伊東深水、竹内栖鳳、堂本印象、鏑木清方等「日本絵画の大家」との接触も深めていました。また、後に人間国宝になる加賀の木村雨山等の染色作家とも接触を深め、伝統を守りながらも新しい着物作りへの準備を進めてきました。

そして、日本画家、西洋画家、彫刻家、陶芸家、染色家による「絵画を着物用の図案に活用する」ための「あかね会」、それらの図案を着物にする染織作家による「染織美術研究会」を1927年に結成、また同年に染織美術研究会の第1回展覧会を京都「華道会館」で開催し、これを「美展」と呼んでいます。

第89回「美展」会場展示風景（1973年）

ファッションとしてのきものブランド…「山本寛斎」との提携～「押切もえ」との提携

ー新しい世代の消費者拡大に向けた取り組みー

当社の社長　齊藤英祐は「歴史や伝統にその時代の感性を加えたフォーマル着物作りと、それらのノウハウを基盤にブランドというツールを活用したファッションとしてのきもの作りの両輪が必要」と言います。

「美展」「加賀名匠創作展」が当社の伝統的なフォーマル着物作りを支える一方、それらの歴史と精神を受け継いだわれわれは、新しい世代の消費者の拡大をめざした商品開発にも意欲的に取り組んでいます。とりわけブランドを基軸とし、ブランドロイヤルティを築き上げられる新しい感覚の着物作りにも力を注いできました。1983年、呉服業界の先駆けとしてファッションデザイナーを起用したのは当社でした。当時パリコレクションで世界からも高い評価を受けていた「山本寛斎」と提携し、誕生したのが「きもの寛斎」でした。業界から大きな反響を呼び、売上も飛躍的に伸び、その後、他社からも次々とデザイナーや芸能キャラクターの名前が付いたブランド着物が発売されるようになりました。当社は、その後も着物業界の古い常識を覆す新しい考え方と新鮮なデザインを求め、ファッションデザイナー「津森千里」「ケイタマルヤマ」「ヒロミチナカノ」などともブランド提携を行ってきました。

また、「SEIKO MATUDA KIMONO」は、2002年に生まれました。このブランドは、商品企画室と営業担当の若い社員が、彼女の感性、生き方に共感し、ブランドとしての導入を熱望して立ち上げたものです。まさに着物を知らない消費者から支持を得て成功したブランドのひとつです。彼女自身が「ブランド」であり、女性の理想の生き方でありあこがれです。彼女の持つブランドパワーこそがビジネスに最も重要な要素だと思います。

2004年からファッション雑誌「CanCam」の専属モデル「押切もえ」さんプロデュースの着物「Moe Oshikiri」を立ち上げました。ファッション雑誌の人気モデルは、若い女性達にとって極めて身近な存在であり、あこがれであり、ファッションリーダーでもあり、ファッションスタイルや商品選択、購入にまで大きな影響を与えています。私達が彼女に期待したことは、「日本の古典的な着物の柄を、今の新しい感覚の着物やゆかたにアレンジし」、彼女がそれを「新しいコーディネートで着こなし」、着物を知らない若い女性達にアピールすることです。また、彼女は「私は明るい色が好きですが、着物には自分の好みを押しつけるよりも、黒とか、紫とか、藤色とかいう渋い色目が素敵だと思います。私はお花が大好きで、そのお花をこれだけ贅沢（ぜいたく）に映し取った衣装は着物以外にないですから、それが嬉しいなぁって思うんですよ」と言われ、彼女好みの素晴らしい着物が出来上がりました。2006年12月には「Moe Oshikiri Kimono Collection」ショーを東京・ラフォーレ六本木で開催、大きな反響を呼び、若い女性であふれました。

今後の新しいブランドとしては、子供服、婦人服等アパレルメーカーと提携（〈pom ponette〉〈MEZZO PIANO〉〈Private Label〉〈VIVAYOU〉）し、和と洋（着物と洋服）の垣根を取り外し、常に新しい消費者にファッションとしての着物を提案し続けていきます。昨今の「ゆかた」をきっかけとして、若い女性の着物への関心が少しずつ高まっていますが、まだまだ新しい消費者の拡大が必要であると考えています。お洒落（しゃれ）に敏感な女性達に支持される、ハイ・ファッションでハイ・クオリティな着物の開発をめざしていきます。

直営店展開…ライフスタイル提案型ショップ

ー自社ブランド商品のアンテナショップ機能ー

当社は、ファッションとして着たり使ったり

できる「和の商品アイテム」をそろえた「ten ten ten」および「和風館　ICHI」の直営2店舗を運営しています。自社ブランド商品のアンテナショップ機能とお客さまから得られる情報に基づいた新しい商品開発を目的とし、また、着物の良さを知る着物好きの人が増えることをめざして運営しています。

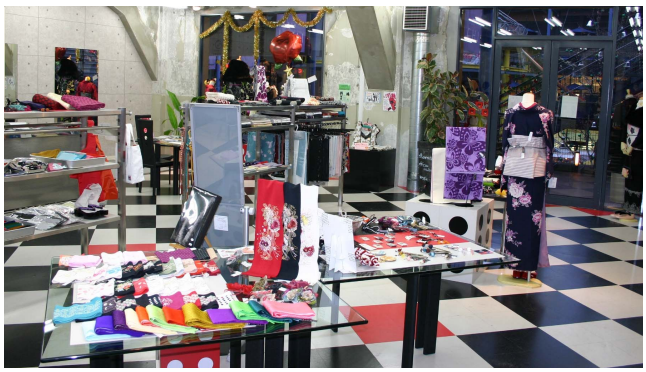
丸紅コレクション「絵画と染織の名品」展（仮称）の開催

京都府からの依頼により、長年の企業活動に伴って形成され、現在では極めて優れた社会的価値を有する、丸紅㈱所有の「時代衣裳」と「絵画」の2つの分野から構成される展覧会が2007年4月13日から5月27日の45日間、京都府京都文化博物館において開催されることになりました。前者は、1929年から着物の意匠図案研究のために収集されてきたものであり、時代衣装のコレクションとしては日本最大級のものです。その中には、秀吉の側室「淀君」が着ていた辻が花小袖の残裂（ざんけつ）（着物の一片）や、それを基に復元した小袖も含まれています。後者は、イタリアの巨匠ボッティチェリ「美しきシモネッタ」をはじめとする日本および西洋の優れた絵画です。

これからの私達の目標は、着物をよく知る着物好きの人に向けての伝統ある「フォーマルきもの」の継承と、普段から気軽に着ることのできる「ファッションとしてのきもの」の開発を推し進め、新しい消費者の拡大をめざしていくことです。

復元された「淀君の小袖」うしろ身頃

ten ten ten（京都市中京区三条通　SACRAビル1F）



和風館ICHI（京都市中京区烏丸通　新風館2F）